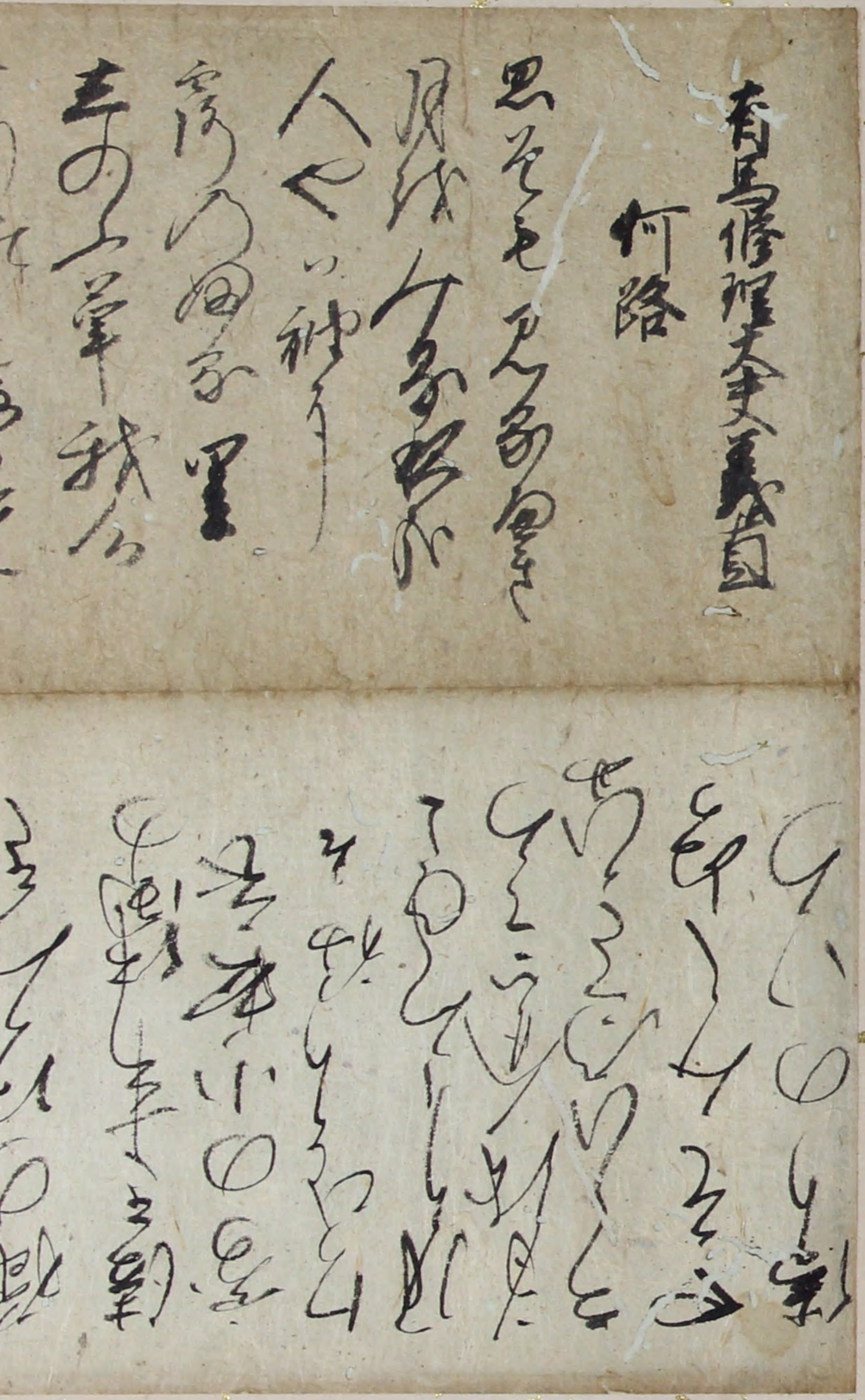
16

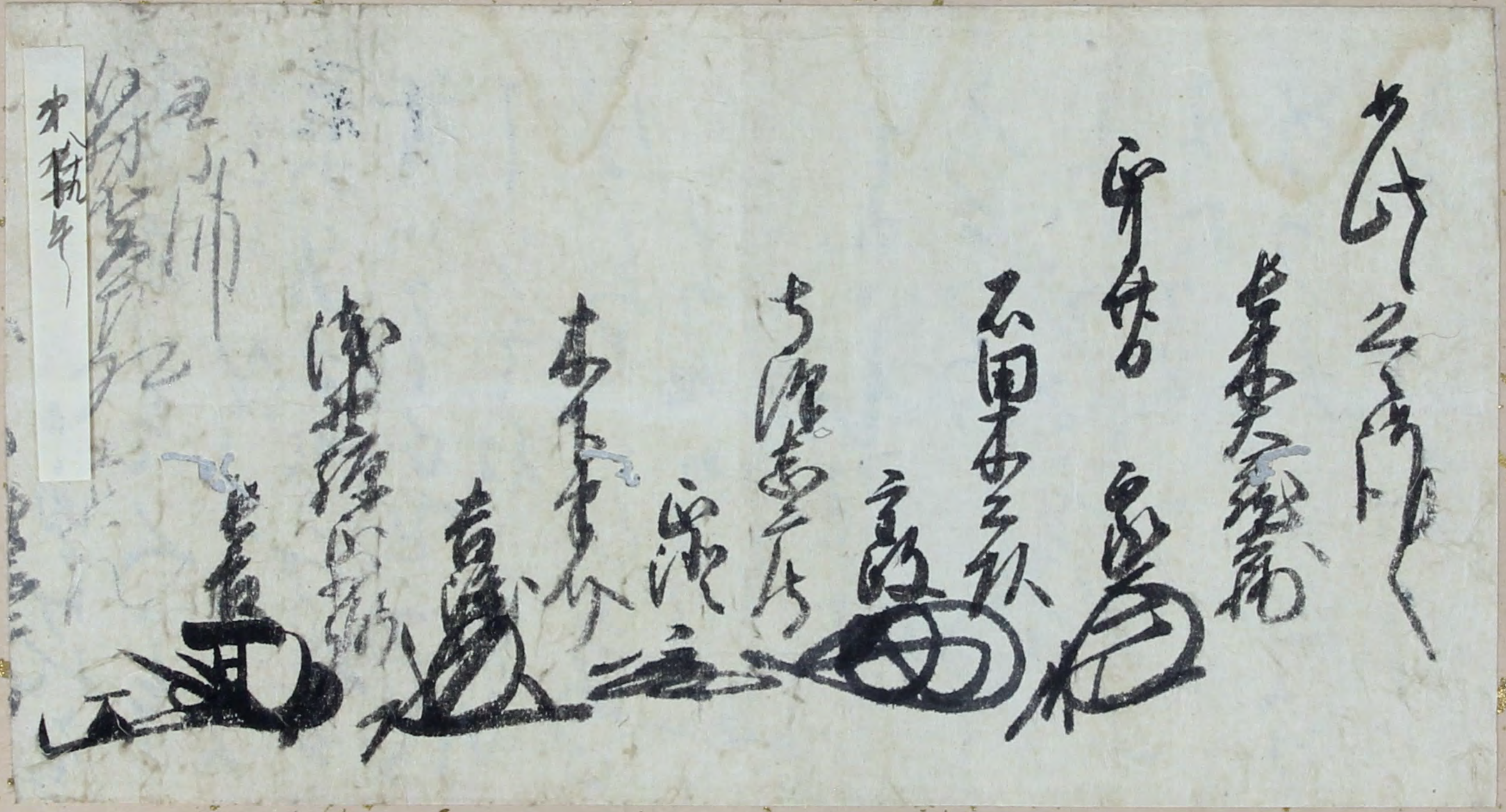
16



有馬修理大夫入道殿

何路

[illegible]



恐々謹言

卯月 [illegible]

[illegible]

有馬修理大夫義貞
河路

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

えふのこそ　思ひぬる
乱み無くて候はゝ
まゐらせ候て申
御めの御事ともの方
猶いかにかとうけ給
りちうねてかしく
ららるゝ　よひまゐらせ
まいりまゐらせ候
まゐらせしいまつ
ろうろうし候
よはかうきおほし
よのうゝうとて
めでたくさりまいらせ
これしくけり

中納言

有馬修理大夫義貞

行路

思ひもえぬ旅の空

月は今宵いかに

人やは神[illegible]

露の旅寝 里

寺の一筆 我名

[illegible]名をそ

うろこゆく

いかに[illegible]

[illegible]

こらの中くり

ふるもしるし

[illegible]のまゝ

山かけそめて

つらき[illegible]

[illegible]

[illegible]松の[illegible]

夕霧立よる

[illegible]の枕して

[illegible]

一筆[illegible]

[illegible]の枝

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一筆のそゝぎて　二

たつる花の枝

わくらしきえ

さくらのさかい

[illegible]

宿とうひ侍て

宿ろし[illegible]

野みも山路

ふるさと静

[illegible]枕

此さて世のうせ

[illegible]秋の

[illegible]にて[illegible]

[illegible]月を[illegible]て

宜二八三句引とうせし

[illegible]

[illegible]

我も来まさく[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]袖さして

[illegible]

[illegible]

三

[illegible]

[illegible]

三

とゝし家まゐらんとて
けふぬこゝろの
胸そくるしき
くらゐくのみそ
そしもちやそ
めるのころや
へいつのまし
花そちるちぬ
うみやま[illegible]
[illegible]やし
さとさ木のは[illegible]
[illegible]のあけぬ
うらさとも
[illegible]とし
[illegible]の
あしたさへて
[illegible]その中き
[illegible]かしくも
月そ見ゆ[illegible]
[illegible]
家のこたて
玉中のそそ

[illegible]

[illegible]
月[illegible]
[illegible]
玉中の[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
思ひ[illegible]
院の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
仏[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
一筆[illegible]
[illegible]
二尊[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

おめ[illegible]
[illegible]
世中に[illegible]
[illegible]
行ゑ[illegible]
[illegible]

おめ候らめも
こそかしく
世中に候を
もりかくり[illegible]
行々候[illegible]
申ていまゝに[illegible]
様よりこゝ[illegible]
[illegible]
都り[illegible]
左の[illegible]
かつさ[illegible]
第い月[illegible]
ふし[illegible]
[illegible]
秘[illegible]
[illegible]
人のこゝろ
[illegible]
一とせい候し
計[illegible]

思ふ様の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
月九日　義[illegible]
[illegible]

ちぬよめゝらよ
一ちせい候し
計まゐらせ候

しらぬもらい
けさん

一のおりハ、張養のこゝろ
たね筋とみすとしてこそ
ぬ右して花とねさ為
にて花とりんさてん合と
として右の寄れこそん
とれて文茄そて、そこのさみ
とねこ是あるぬりして挿
のとれを紙つまんはみしわさ
乃かちぬくけてまくとは
たのみふけしらちつ
ゆいニッて紙をおさへ右
そゆひつけとつれさそて
にうてまくみしみたる
ふそてきりてまくやをれむ
すいそ右のさくやも計
このたまとくわつのふたれの
あもとい、その挿といふま
ちうらへてつけて紙の板と
まく右上のさきとうて
さらに一寸丈のさんれ板を
紙ならす挿と紙のさきうみ
さし丈い花と両のみたれ
て前のかうくしてそこの
板のたの方のさきに花の立
と紙たなあきてその事
文右ねはすとうつすまこ
しかんすかをうけして張養

札の左の方にさゝよせ
と紙たゝみをきてその外
又右はゝとうすとまて二
しかんすゝかへして絵表
の所ハいてその二枚とこえ
いとの子ちそ地かされさし葉
とうす御ゆうとのしらの
法数しもしかしけて張
裏紙わるのこと申聞して
以てくとこう御二毒此
いとこうかも奥張居に
まんふかし　之

一　御膳くゝろ付銭のみをし
板すハ此右そ　梓をねき
てたまうこそ　政毅と右そ
より又ためる　ろうさらいと
ばよかや　そのたとの板と
これて　うやうとちてきに
しゅ又そうの板をとうて銭
此ゆうはにて　まれてさん梓上
布上右ふとうて銭の上に之の
ことくまく　毎紙とはをて
かくもみ所　ふして信申
きるや　又白死右たにきて後
事おうて先右まもて　梓ととう
たのうゆふれ御し　又右まて記
と云たたみけまじくのまれさく
上の板と二つ先れ板ととしろ
かうさし所のいふのされ
御み文まての板と申れ板のこと
れ々けさ記と先の云のみする
とさて記の板のかとなし

かけ文まんの折と申也板ふをき
れなけさ紙と云のうちにゐる
とさて紙の折は、一寸とし

一 そへ紙饗食之事
是も手らし常木る宜食
とくいし筋とたるちをし
定中の板紙と名付て候さゝ
てまなを ね来いまかゝんさる
かえをらして我右の方の二の
膳のあたとくさて二つみさ
かと存のれしれ紙と火に
在らかうして板をかたれ
の手に添してにたとたの
まうそなん右ん中へやと
ときに右のうちて秋まれさゝ
て二ふりたのまとさそて流
て秋に鳥そんもをとひとして
かす膳のまへ又と二を据をと
柄といるよゆひつ詠て存
ちそ能のさ新右はおれう
さして存のうて紙の二ちと
ちうて紙のさきをハ二つけと板に
わくしてまきあけてその紙
の実と云は鮎のとのこ
と云すかわり とにち
帰つけとくいこ板又鮎とを
しかよしてくやゝとくに
てくいるいその板とて又紙の前
此方よりてけと紙の板名ヲ
にそさぬまをけてときて
くらん

一 帯つけ六の[illegible]てう紙

お前よりのハと花の枝よろ
にもこさぬまをけてをきて
候也
一 瓶つけ候ハ、路にて立る花
枝ハ事ハ間をはなし
てうしろ右ニあしれま中ハん
と嵯峨乃にすミつけてとられ
花乃花と揮とれてたニとら
花のまゝて花の先の下よりは
うことらて先のもとよりたれた
ちゃうそこの花と花の至
去ニ三もと揮こをさゝてよ
えて花の上の上よ花の形ヶ
右のてんのお枝よく色し
りぬこの枝ぬきこんあん前
のこく枝をけら所へ前の枝
いれらさ结ん付ハそのまゝ
候也

一 鴫乃つけはの枝之事
是ハ花瓶三の中ニまいらせ
中しらぬニハつてたかゝす
きかして聚養花枝是也
しきてそし向ハ花養花
かきをさしれハ花よあろ 一
二 色んをりしむときたる
座中と見合て右のまゝん
鴫田つはりの至とるやん
たちりぬはにたく目をつけ
まし鴫のつと枝ヶむき立
やうにしてかのをくらも
かとしおきまはへつはりの

まて鴨のつと鉄かむき子
やにしてまためのくちらう
こそしるまいはせつかりの
うちにある毛とゆふなのね
くる鳥をさけ毛とそこに
かくする事にして本々右の言
二の毛の尾のあしたよりとれ
こはたなりら本鶴とさ
やそえハ二のおのさくし
ときさそへつなととるとし
鳥の尾の羽ひとつのあわり
まとれ鳥の毛とじうつる
て、此羽の白ほとん爪さ
きと秋のあこかうしを置き
そねつなのふこともらる夢
右のふちまくれはく然
鴨のことつかうる羽のいろこ
うつほうと其のこし夢
にときおもと本のすそら
ほねの中にいは又右ハ毫
とゞらけん右の人には也
左の手よろき右の手よりん
其の所へよく色くして然
羽をひきにさゝはけいはえ
手に先人殊養あるれし
に湯まりうはしかさそ鴨
の羽かしとうろうけ鴨の墨
のトことや

一 ほくそれをのつしやしの事

一 ほくミれよめのつしやうしの事
魚にハ何のかれにも人を治
酒乃付もらいかなる時ハ
座中よりも人ありて右の方にはし
置とおとも右の手にすくひて
あまのうしろをとらへてそハ
かさなるともんしん我かしの
右の方のそてのくにをとへまろ羽
しとゞろ羽をしのごにて
くろかとおにいてきたや
しとて二の膳のうちをとに
つけよき又ハ酒なとく人を
ミはくほくミよ右の羽とよろ
おほくミれ羽の上にと紀
さてみつてこと置花にうらやみ
うしろをみそくんしておの
膳をとてとて羽のうへまろ
はくこれみを張養しんはや
酒を入へはくミのちにこと
くせしやうしとは入れまわ
定いゆふへて懐中さる
身をそれに龍の人へはなれ
なしみと此前まもの
まくの御方にこんにて
言わ拓をみさへはふはさいし
可趣了文伝へし

一 鶴ハ羽のさきは揚羽の事
御膳の中又ハ二膳三膳の
中にうしとろの聚楽にハ
すことやうよく入して鶴

初膳の中又ハ二膳三膳の
中にもことわり飛鳥ハいか
すこしやうしまへくして付鶴
をは右袖にもやし流
久しく雉子まいりなとあくしさ
と云ふまてすけ立つれし
御酒一二返まゐりてよ
座中とりて右乃手にまゐる鶴
の臺をとらせけれ右の手に
さくて鶴の左の羽さいの下
とゝへるによらしん又かりて
のこくこれて二のえしの
我おおきうしくのくる飲
と右ノ手にて初右
たらうるとはさこてりわ
さら柄にしてそれとハ右
よりきぬ初膳と二のもの
おひしまひのこころして
それとさきて鶴乃臺と
右のてんそうて鶴右
の二の膳乃まへのたゞこれ
の手をはにきて右の手こ
手にてさやし見えていらの
ちとうける臺にゝくて右
みて鶴のた乃羽サナおき
やて臺のまへありへとさき
又羽の内ハいく程ナ盛也
たさかと鶴りくらミ之右手
にてぞろおる羽乃上ニをし
て元桂又鶴の臺を右の
にそうる右のてふせく
くかへし右のてふざろ御
りの亦へさやりくさて羽て
まきくらさらると右ゆれ
これ猶はにまん左の手にて
亟らみうりよっておの亦へ
さて御酒のたひさハいくる

御まへより又つぎの所へさ
きて御前のかよひにいで候て
飯[illegible]さて又御帰り
らけしをさゝれ候て箱
のふたにおきて御膳、
羽しらいきて又うへの羽を
右の手にて箱のふたをさせ
これ右の手にて箱をとる
まうしんしてかへる御前にて
懐中あるべし

一 おさかなのつきあひとは飯[illegible]
等しつれて御ゆつけとも
色かもしのまゝ次膳の中にある
出し又二のせんかくて三の膳
にてすへ下膳の中に
あふらをかいて茶て
宣命の茶をくいてさて
はしを膳にさしこちへよせ
きていろいろたかり茶の碗
ぢきの手をそくいらるゝ
して扇をぬき[illegible]
すへまこしらへさてきこえ
ごしらへしてゐるあひに
もちて扇のかなめをときてや
さていろをはあの方へさし
てかきをいふ右の手にて
いろいろのかしをぬきて[illegible]
のそえふく又[illegible]
さてさしとりて箱をまよ
ていろいろをつきてとれ
をぬいてから[illegible]
たきつとくも又おさかなの
[illegible]

ていたゝきことつきてたて
さかなへうすへん飯善なとくう
たきものとくふとも又其ゝりの
おもて御酒二献なと呑て
て足ゆひをならはしきを
はきそて水つきたえたえ
くゝ足へ貴賤して又て足
とはたの手におかれたし
扇のうへにをきたるもよし
さて後は飯善なとはよし
汁出ゝうへにてもの成候
とらへ御膳にとりはら置
かくす又懐中してもよし
さか膳のへてうへに付も置
海へとをきて十しそ破わる
かいしき取して

一雉の鳥なとくふ様の事
右ニ有候ニ御膳にも二也
又ハ三の膳にも出るへし
御膳の中にも附ハ様の物也
あしらい附はしと左の手
ぞう而ハ右手を見合てたて
鳥のまゝもちて豊なるに
やとゝれおろして御膳の影
豊のまへにをきてひらけ
右のうちを入て右の手に置
そくとぬきて右のくびの下
よきさて又はしと右の手
にとりみとめてしとりたる
手にてつきさて四つくいなり
とりてうらからいぬ

そくとぬきてあのゑのしふ
よきさてみはしと右の手
にもちおとしろてしもたら
手にてつきて四くい文字
とらへてをほいてわたしまた
しにてんやこはんてしもと
あさの中酒一度のとおは
せて文右乃目にて西のよ
これもして西のもくにさる
なるものまゐれんとて酒
さとへるあとしくふり明ハ
行ひけりとてらく西のへ
のうちて右膳のうへつきて
よく美候

一海老乃船の三の事
右膳する何ニ三の名を
以て旅善にあつかうこ
先海老を壽たに右の年た
とも秋まへかれたのお思ふ
いふし　しかてとるわかれと
してたのまにもちあるまえ
おゐとゑつし海老のかしら
のきんみ秋に右乃三よへつ
はもてをもうく立ちよ
ひ合てらきはゝかゝし足を
ぬきて帆を一羽のさきにて
海老のさをとりしたるまれ
ぬきて右の文字かくしら羽
たらをりて旅善あるさま
帆そしらとよすみくけて
海の上にとてはいれてこ、
うきかとまれ

を左の手にてうへかしらを持
たち手にて箴書にありさし
帆をしらとをすこしけて
海老の上にとをいかにも、
ささかをまへ人ゑく心
さてよみ相まちとかり
ニ三く秘々あまよ以て膳
のくさり前膳の中にもくべし

一海老のこさう津きの事
指傳けりとたまこそかし
左の手にて取とゑをは
をとらゝ今にこれを人に
ほそて海老ともさん今右の手
出て海老をゆひてつやとき
きくやの秘々方にむきこな
さらはさきとそうされてく秘
あの事をまそれてときもはい
にもすひて此膳のあのてま
とくさは海の出てま左の
手をおうわ御せけて海老
の頭の尾のまくまとくさ
れは指書花と成のまえれ
え海老の上のつらのさ
に針のさき秘名また歟
向うをくさて右の手まて海
老の三をはふの内ま出に
うちやしきなく秘あ
手にれるとしまつそと
しくけしとれ合まて四つ目の
けとすいてけとりるの下くさい
てきて海老をそて出て今に
みへとくそうてとい二海

さくはしとれ候まて三ッ目の
けとすいてけとりて下に置
てさて海老をとりおきて下に
みそとりてうへてとに二盃
御めしのけとりて置
ちゝのゝさら菓とりて又
そうどとりて二の膳の右の
たゝみ汁とりて置を
中の菓とりて又そうとりて
ミツめの汁と置て二の盃の
菓とりて又そうしとりて右
同の汁とをきて三ッ盃
の菓とりてさてそへてれ候へ
大汁と右のおまへそうしこから台
みゝまかけてさう膳の上
もそうしよく〱[illegible]
ゝ又汁かけてらの右膳のさいと
くわし二の膳のさらの菓と又
三ッとをにくわへくとうにハ三ッ
目の中の菓そくいこそて
又御酒一二あんもつく
くら海老の根ありて附の右の
手とうろ汁海老の[illegible]
左の右の御子をもちて[illegible]
左と右のりそれ二の膳へ
右の[illegible]右のまつて
海老の[illegible]て海
老[illegible]右の[illegible]
[illegible]
入て[illegible]二の膳
の[illegible]御酒
に湯ありて[illegible]
[illegible]海老の[illegible]
[illegible]又海老の[illegible]
[illegible]

[illegible]おろさてハ[illegible]
に湯あらて[illegible]とはおさろ
ほしては海老のかしらの[illegible]
にうしとて海老の其[illegible]に
ナかし[illegible]をかこハぬの
あしらへさしるもそく又にの
ことを思ひはしとおさへて
海老の毛とりて懐中する也
これ也

一 かさミのせいかうつ様事
是ハ大膳二三の中にまてに
様[illegible]ハかう事也大膳中に
まつ小手二つさいて[illegible]と
くいて様の前の箸にてたま
ねてすそとゝめくらして取
肉とをさけるものの其数
ことくに取て右の手に箸を
わりゆへ二つん三を[illegible]
又ねらいにてのゆの[illegible]
こなして左に取て魚を持
おこり箸とゝゆへ二三を
ことぬるを膳ふしして
こゝろさんいう前にとて
又こゝにひしこをこと
此酒一二度まゝて
右の手にてこゝの手に
まゐて[illegible]物をすて右[illegible]
のたまはぬ取れしを[illegible]
も何もこゝろさし候も
しなへ中食ふてしう

まして壹挑よ
のたゝみ近江にさしにし心
も仕合こゝろさしもちと
じ又おゆ気つてとり
口膳まわしはたこ捧
のちく足の二にて事すゝ
二つ

一 金翼袋表ノ事
お膳ふて二ノ膳ふて中ほと迄
そ付ハ汁も入ハ杯をけまゝ
おとさ御酒一二返も参え
さて序中に居替して
らき此右の手にて金翼の
蓋をとりなをしてつ
いかにもして右の手
に添して右の手にて蓋と
わきにおきて秋の方に
ときさて又左の手に金翼
とおへ水ひきととれてさ
右の手にてはつさとひき

金翼と扇の上てまさして
又乾と扇て水ひきと気
ての根はとし由し
いかにて右の手にて金翼
の蓋の上に乾の二方秋の方
扨様にまきさんて又扇の
下て金翼の左にのせ
おきて扇前小柄

萱とうらなのまと云へ
いかなる色にて花の事
云渡して右の方ふんきと
わきみえて秋の方に
をきさて又左の方ん金葉
とおく水ひきとられて花
右のまゑてたつさとひくき

金葉と扇のまとをとられて
又花をとられて水ひ義と云
て萩の根なとし候し
いはつて右の手にて金葉
の萱の上に萩乃方秋の左
判候にをきさんとて又々扇の
ゆへ金葉の傍に置と
詞をそへ扇ハ小柳に
まふて傍をそへてくさやに
勝負の勝負なさへそへし金葉
とはつゝえきよの萱の
下に侍もうくそえく